・イベントの準備や当日の進行がスムーズに行われているのは、これまでのイベントで積み重ねてきたボランティアの経験が活かされているからです。

・季節を問わず、海の広場を用いたイベントについては、市内の子どもを持つ家庭に定評があり、すでに恒例行事として定着していると考えられます。

［次年度への課題］

・ボランティアの活動の目的を明確にし、細分化したため、それぞれの活動に応じて、さらにきめ細やかな研修を行っていきたいと考えています。

・ギャラリートークボランティアおよび、小学生美術鑑賞会ボランティアについては、平成28年度に新規募集しており、さらなる増加を期待したいところです。同時に、児童の鑑賞活動をよりサポートできる体制を整えられるよう、検討を進めます。

・ギャラリートークボランティアの活動周知について、ボランティアと相談しながら、仕組みや方策を検討していきます。

〔評価委員会による二次評価及びコメント〕

	一次評価	二次評価	評価委員会コメント
達成目標	A	A	特になし。

	一次評価	二次評価	評価委員会コメント
実施目標	A	A	ボランティアの方々の希望や要望に応じて、活動内容や募集方法を見直す、あるいは活動の目的が明確にされていることが、目標数値を上回る結果を生んでいる。

・一生懸命やられている中で、さらに内容の精度を上げようとして努力をしている。［菊池］

・ボランティアの方々の希望や要望に応じて、活動内容や募集方法を見直す、あるいは活動の目的が明確にされていることが、目標数値を上回る結果を生んでいる。［柏木］

・市民ボランティアが活発に活動できたのは、美術館側担当者による下支えが大きいと思う。［木下］

Ⅱ　美術に対する理解と親しみを深める

③ 調査研究の成果を活かし、利用者の知的欲求を満たす

〔一次評価〕

達成目標	実施目標
A	A

【達成目標】企画展の満足度 80％以上

［目標設定の理由］

・展覧会を企画・実施することは、美術館にとって基本的な活動のひとつであり、中でも、企画展は、波及効果が高く、最も力を注ぐべき事業といえます。こうした認識から、企画展に対する来館者の満足度を、美術館の社会教育機能の高さを示す目安としました。

・満足度は来館者へのアンケートによって算出しており、同じ方法の調査を継続的に行っています。またその満足度の内訳は「作品」「観覧料」「配置・見やすさ」「解説・順路」「心的充足」を計っていて、その総合数値を出しています。

・満足度の内訳を見ていくと、「観覧料」「解説・順路」の内の順路については、満足度を上げていくことには限界があり、「作品」「配置・見やすさ」そして解説について改善の余地があります。

・ここ数年の数値の変化の経緯を総合的に判断し、目標を80%以上としました。

※ なお、年度ごとの「企画展満足度」を算出する際には、それぞれの企画展の観覧者数の比率を反映させています。企画展Ａの観覧者数をＡ（人）、企画展Ａの満足度をａ（％）とするとき、年度ごとの満足度（％）は

（Ａａ＋Ｂｂ＋Ｃｃ＋Ｄｄ＋Ｅｅ＋Ｆｆ）／（Ａ＋Ｂ＋Ｃ＋Ｄ＋Ｅ＋Ｆ）

で表します。

［一次評価の理由］

目標の「80％以上」を超える 87.0％という数値となりました。

	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
企画展満足度	80.9%	77.6%	84.6%	87.0%

企画展別にみると、「ほっこり美術館」は、親しみやすいタイトルとテーマでした。「解説・順路」の74.8%が最も低く、作品の満足度は90.1％でした。他の項目も80%台と概ね高かったといえます。

「ウルトラマン創世紀」は、当館で初めてサブカルチャーを扱った展覧会。夏休みに開催しましたが、1966～1980年の子ども文化を扱っており、その当時子どもだった40歳代～50歳代の男性が特に多く来館し、総じて高い数値となりました。

「長新太の脳内地図」展は、人気作家の長新太の絵本原画を中心に構成した展覧会であり、また「第２次横須賀市子ども読書推進計画（第２次愛読プラン）」に位置付けられた事業です。作品に対する満足度は94.6%と高く、大人から子どもまで満足した結果が表れました。

「浮世絵にみるモダン横須賀＆神奈川」展は横須賀製鉄所（造船所）150周年を記念した事業です。満足度は非常に高く91.8%となりました。また来館者の年齢構成として、70歳以上、次いで60歳代、さらには市民率も高く、身近な地域や知っている地名が多かったため、期待に応えられたと考えられます。

「嶋田しづ・磯見輝夫展」は、逗子、鎌倉出身と地域ゆかりの現代作家の二人展です。作品や配置・見やすさについては80%を超えましたが、解説・順路は69.1%でした。章解説は用意しましたが、作品解説をつけなかったことが理由と考えられます。総合的には81.8%となりました。

毎年恒例となっている「児童生徒造形作品展」の観覧者の多くは出品された子どもたちの関係者であり、内容を批判する要素に乏しいことから、他の企画展と満足度を比較するには注意が必要ですが、88.7%と高い数値を得られました。

また、要素別に満足度を検討すると、「解説・順路」については、改善の余地がある高くない数値となっています。アンケートでも、「キャプションの漢字が読めない」「解説が難しい」などの意見が寄せられているので、より分かりやすい表示をしていくなど、今後の課題とします。

【実施目標】

- **幅広い興味に対応するようバランスをとりながら、年間６回（児童生徒造形作品展を含む）の企画展を開催する。**
- **所蔵品展・谷内六郎展をそれぞれ年間４回、テーマをもたせた特集を組みながら開催する。**
- **知的好奇心を満たし、美術への理解を深める教育普及事業を企画・実施する。**
- **所蔵図書資料を充実させる。**
- **利用する人が快適に過ごせるよう、図書室の環境を整える。**
- **主として所蔵作品・資料に関する調査研究を行い、その成果を美術館活動に還元する。**

［目標設定の理由］

社会教育機関としての美術館は、常に知的好奇心を満足させる事業を行い、また、そのための環境を整えていかなくてはなりません。美術として扱うべき領域はとても広く、利用者の幅広い興味に応えるためには、所蔵品展以外にもさまざまなテーマを設けた企画展を開催する必要があります。作品の借用が許される期間に限度があることなどを考慮し、１カ月半から２カ月程度を目安とした年間６回の企画展を計画・開催しています。また、コレクションの魅力を紹介するために、所蔵品展および谷内六郎展をそれぞれ年

間４回開催しています。

さらに、横須賀美術館では、美術への親しみ、理解を深めるために、講演会やワークショップなど、年間を通じてさまざまな教育普及事業を展開しています。ここでは、広く一般向けの教育普及事業について、評価の対象とします。

これらの事業を企画・実施するための基礎が、調査研究です。範囲は、所蔵作品に関することを中心に、広く美術に関すること、教育普及に関することを含みます。

［一次評価の理由］

27年度の企画展は、親しみやすいテーマ展、サブカルチャーを扱った「ウルトラマン創世紀」展、人気作家の絵本原画展、浮世絵、現代作家の個展など多岐に渡っていました。

「ほっこり美術館」展は、当館の単独自主企画として開催し、近年人々の口にのぼる機会が増えた「ほっこり」をキーワードに、埴輪、大津絵、浮世絵から日本画、洋画、現代美術まで幅広く約120点を展示しました。本展は、横須賀市自然・人文博物館、神奈川県立歴史博物館などが所蔵する蓼原古墳出土埴輪を揃って展示する初めての機会となりました。

「ウルトラマン創世紀」展は、巡回を受け入れるかたちでの開催でした。会場構成では、単なる懐古趣味に陥らないよう、ウルトラマンシリーズの制作に携わった人々のオリジナリティや、技術の紹介に重点を置くよう工夫しました。

「長新太の脳内地図」展では、絵本や子どもの本の原画のほか、大人向けに発表された漫画やイラストレーション、エッセイなど約300点にのぼる作品を展示しました。絵本を手にとって読むことができる絵本コーナーも設置し、こちらもたいへん好評でした。

「浮世絵にみるモダン横須賀＆神奈川」展は、横須賀製鉄所（造船所）創設150周年記念事業の一環として開催されました。神奈川エリアを描いた浮世絵のコレクションで知られる川崎・砂子の里資料館の協力を得、江戸時代の名所絵や明治時代の錦絵など約250点を展示しました。地域の歴史を長いスパンで振り返るという展覧会趣旨に対しては、これまで美術館に足を運ぶ機会の少なかった地域の高齢者層からも好評を得ることができました。

「嶋田しづ・磯見輝夫展」は、個性豊かな二人の県内在住作家の最新作を含む約90点を展示し、「色彩とモノクローム」をサブタイトルとし、油彩と版画の対照的な作品世界を楽しんでいただきました。

所蔵品展では、会期ごとに特集を組み借用作品も加えて、より魅力のある展示となるよう努めました。結果的に小企画展を行ったこととなり、総合で満足度が72.6％となりました。

第１期では、横須賀出身の版画家で多数寄贈を受けた「木村利三郎」を特集しました。また同じく新収蔵となった藤田修の版画集を紹介しました。

第２期では、画家・上條陽子の油彩画と、新作インスタレーションを組み合わせ、北側展示ギャラリーに展示しました。

第３期では、横須賀製鉄所（造船所）150周年記念事業の一環として、フランス人エミール・ド・モンゴルフィエが残した写真、書簡等を特別展示しました。

第４期では、横須賀市出身の日本画家、山中總について、所蔵品を含めた11点で構成し紹介しました。また、山中にちなみ、所蔵作品の中から戦後の日本画を展示しました。

谷内六郎館では、所蔵品展の会期と連動して、年４回の展示替えを行っています。25年度は、第１期では「かぞくの時間」、２期では「子どもの一日」というテーマをたて、３、４期ではテーマ展示を行った他、NHK 日曜美術館40年記念「みつけよう、美」キャンペーン連動企画として、映像に登場する作品と資料を展示しました。

教育普及事業（一般向け）については、一覧すると下表のようになります。

いずれも、参加者と講師、主催者が互いに質の高いコミュニケーションを取り合えるよう、そのつど適正な規模を考えて実施しています。また、講師と美術館スタッフが打合せを重ね、入念な準備を行なっています。結果として、規模は大きくないものの、参加者の満足度の高い事業となっています。

講演会・アーティストトーク　（単位：人）

タイトル	実施日	講師	定員	応募	参加
アーティストトーク	4 月 25 日	深堀隆介（「ほっこり美術館」展出品作家）	70	－	85
アーティストトーク	5 月 17 日	鴻池朋子（「ほっこり美術館」展出品作家）	70	－	33
講演会「『特撮』ってなんだろう？」	7 月 4 日	池谷仙克（美術監督）	70	－	75
講演会「長新太の絵本の方法－編集者がみた２冊のラフ」	9 月 20 日	土井章史（トムズボックス代表、フリー編集者）	50	－	75
講演会「私と浮世絵」	11 月 14 日	斎藤文夫（川崎 砂子の里資料館館長）	50	－	49
「磯見輝夫×建畠晢」	2 月 14 日	磯見輝夫（出品作家）、建畠晢（多摩美学長、埼玉県立近代美館長）	70	－	65
講演会「生活家電の夜明け－『白』が輝き始めた時代」	5 月 30 日	市橋芳則（北名古屋市歴史民俗資料館[昭和日常博物館]館長）	70		20
作家によるギャラリートーク	7 月 18 日	上條陽子（第 2 期所蔵品展 tabra rasa 出品作家）			26
「嶋田しづ・磯見輝夫展」ギャラリーツアー アート＆ディナー	3 月 12 日	当館学芸員	20	18	16
学芸員によるギャラリートーク（各企画展）	5 月 9 日 7 月 11 日 9 月 26 日 11 月 23 日 3 月 5 日 3 月 26 日	当館学芸員			104 *合計値

展覧会関連ワークショップ　（単位：人）

タイトル	実施日	講師	定員	応募	参加
谷内六郎館関連「SHOWA スパイ大作戦」	5月31日	松村淳子（アートエデュケーター）、伊藤明良（北名古屋市歴史民俗資料館[昭和日常博物館]学芸員）	10組	10組	8組(25)
浮世絵展関連「摺師の技を知る-摺りの実演とお話、ミニ・ワークショップ」	11月29日(2回)	公益財団法人 アダチ伝統木版画技術保存財団	60(各回30)	50	50

オトナ・ワークショップ　（単位：人）

タイトル	実施日	講師	定員	応募	参加
「ステンドグラスのオーナメントづくり」	7月12日(2回)	nido（ガラス作家）	10	50	10
			10	36	10
「ステンドグラスのクリスマスオーナメント」	12月2日(2回)		10	80	10
			10	48	10

映画上映会　（単位：人）

タイトル	実施日	講師	定員	応募	参加
冬のシネマパーティー『ブランカニエベス』	1月30日	キノ・イグルー（シネクラブ）	25	21	19
	1月31日		25	28	25

教育委員会他課との連携　（単位：人）

タイトル	実施日	講師	定員	応募	参加
歴史講座（横須賀市自然・人文博物館主催事業および「ほっこり美術館」展関連事業。横須賀美術館）＊	5月20日	稲村繁（横須賀市自然・人文博物館学芸員）	―	―	37
第39回横須賀市市民大学講座「フランス文化受容の地・横須賀：浮世絵を介して開花したジャポニスム」（横須賀市生涯学習財団との共催。ウエルシティ市民プラザ）	10月26日	当館学芸員、小林照夫（関東学院大学名誉教授）	120	87	82
第37回美術館めぐり「横須賀美術館『浮世絵にみる モダン横須賀＆神奈川－斎藤コレクションから』」（横須賀市生涯学習財団との共催。横須賀美術館）	11月19日	当館学芸員	40	38	35

企画展・所蔵品展・谷内六郎展を合わせて、計8回の講演会および展覧会出品者によるトークを行いました。展覧会関連のワークショップは３回（同内容で２回実施の分を含む）実施しました。

平成27年度の講演会は、出品作家や関係者を講師にむかえ、リアルな制作エピソードをお話いただくなど、展覧会と深く関わる内容で実施することができました。参加者も多く得られ、また事業効果の面でも、展覧会への理解を深めるという目的に適うものであったと考えます。

展覧会関連のワークショップでは、デモンストレーションとの組み合わせ（浮世絵展）、作品鑑賞との組み合わせ（谷内六郎館）といった、当館としては初めての手法も取り入れてみました。結果として、これまでとは異なる参加者層の開拓に結びつく効果がありました。

当館の特徴的な事業の一つである「オトナ・ワークショップ」では、以前開催して好評だったステンドグラスを再度テーマとして取り上げました。また、通例では年間に２テーマで各２回行なうところ、平成27年度は同内容で季節をずらし、計４回行いました。当館のワークショップは倍率が高く、なかなか参加できないという声がありますが、これをある程度解消する効果があったと考えます。

映画上映会は、「シネマパーティー」として恒例化しているイベントで、例年通り、安定した参加者数を得ています。今回は、参加費を1,700円（通常のワークショップは1,000円）とし、トサカンムリフーズによる軽食を提供し、好評でした。

また、市民大学講座や博物館との連携による教育普及事業を３件実施し、合わせて150名を超える参加を得ることができました。

図書室に関しては、定期購読雑誌や作品集をはじめ、美術史・デザイン・建築・写真など幅広い分野の美術図書と、自館で開催する展覧会に関連する資料、子ども向けの美術入門書やアーティストによる絵本などを収集しています。配架の工夫や室内案内表示により、利用しやすい環境づくりに努めているほか、展覧会関連資料については、図書室だけでなく展示室内にも案内用のファイルを置き、利用の拡大につとめています。

〔評価委員会による二次評価及びコメント〕

	一次評価	二次評価	評価委員会コメント
達成目標	A	A	企画展の満足度は高く、「利用者の知的欲求」は高い水準で満たされている。

・来館者総数の１％強のアンケートに基づく数値結果ではありますが、出品作品に対する満足度もすべて高い数値を示しており、「利用者の知的欲求」は高水準で満たされていると評価する。[柏木]

・美術館にとって、企画展は波及効果が高く、力を入れるべき事業であると言われている。集客力のある企画を今後も期待している。[草川]

	一次評価	二次評価	評価委員会コメント
実施目標	A	A	展覧会の内容もバランスが取れており、関連事業にもしっかり取り組めている。

・展覧会の企画そのものが、色々な関心をもった方々を満たす場を提供するようにバランスの取れた事業が設定されている。関連事業にもしっかり取り組めている。[柏木]

・５つの企画展を鑑賞した。大人や子ども、親子など様々な世代が興味を持つことができ、みな楽しい企画だった。[河原]

④ 学校と連携し、子どもたちへの美術館教育を推進する

〔一次評価〕

達成目標	実施目標
A	A

【達成目標】中学生以下の年間観覧者数 22,000 人

［目標設定の理由］

子どもたちが美術館に親しみを持ち、利用しやすくするためのさまざまな取り組みをしていますが、その成否は、実際の観覧者数に反映されるはずです。

従来、横須賀美術館では、一定の質を保った美術展を年間通してバランスよく行うこととしています。特に夏季には、家族で楽しめる美術館であることをアピールするよう心がけ、平成26年度については「子どもと美術を楽しみたい！キラキラ、ざわざわ、ハラハラ展」を開催しました。その結果、特に幼児の観覧者数が前年より大きく増加しました。今年度も、この方向性を維持していくことを前提に、美術館でなければできない子ども向けの事業を行います。

しかし、市全体の14歳以下の人口が減少していることや、子ども向け事業の対象からははずれる中学生の観覧者数が横ばいもしくは減少傾向であること、また、平成27年度より、収支改善の取り組みとして子ども向けワークショップの参加を有料化する予定であることなど、中学生以下の観覧者数が容易には増加しにくい条件がいくつか見られることを考慮し、平成27年度の目標は、これまで通り22,000人としました。

［一次評価の理由］

27年度の中学生以下の年間観覧者数は24,173人となり、目標を達成しました。

中学生以下の観覧者数　（単位：人）

	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
幼児	4,314	5,358	9,216	7,202
小学生	11,301	11,819	12,851	12,639
中学生	3,881	4,119	4,003	4,332
計	19,496	21,296	26,070	24,173

若年層に配慮した事業と、そのＰＲ計画の成功が、目標達成につながっています。

夏休み期間に開催した「ウルトラマン創世紀展」の中学生以下の観覧者数は9,331人、秋に開催した「長新太の脳内地図」展は5,388人でした。年間の中学生以下の観覧者数のうち６割が、この二つの展覧会の観覧者で占められたことになります。

この二つの展覧会では、いずれも、市内の小中学校を通じ全児童生徒にチラシを配布しました。展覧会情報を、学校からの配布物という信頼性の高い手法で周知することには、一定の効果があると考えられます。

このほか、美術館では、児童生徒造形作品展の開催や、子ども向けワークショップ等によって、小・中学生の造形活動を支援しています。平成27年度は、児童生徒造形作品展において約2,600点の作品を展示しました。同展の中学生以下の観覧者は5,485人でした。また、映画上映会を含む８つの子ども向けワークショップを実施し、合計で790人（保護者を含む）の参加を得ました。

鑑賞の面では、小学生美術鑑賞会（全市立小学校６年生約3,500人が参加）、中学生対象の鑑賞教室（保護者を含む197人が参加）、未就学児から小学校低学年を対象とした親子向け展覧会ツアー（３回実施、13組29人が参加）、保育運営課との連携による市立保育園10園を対象とした鑑賞プログラムなど、年齢別にさまざまな鑑賞活動支援事業を行なっています。いずれも、継続的に実施しているものですが、教員や保育士との連携、他館との情報共有により、つねに発展的な内容となるよう努めています。

【実施目標】

- **学校における造形教育の発表の場として、児童生徒造形作品展を実施する。**
- **学校と緊密に連携し、子どもたちにとって親しみやすい鑑賞の場をつくる。**
- **子どもたちとのコミュニケーションを通じて、美術の意味や価値、美術館の役割などに気づき、考え、楽しみながら学ぶ機会を提供する。**
- **鑑賞と表現の両方を結びつけたプログラムを実施する。**
- **小学校鑑賞会を充実させるため学校との連携を強化する。鑑賞会と連動した教材「アートカード」の一層の活用促進を教員と協力しながら行う。**

［目標設定の理由］

美術教育は表現と鑑賞との両輪によってなりたつものですが、多くの学校教育現場では鑑賞の機会に乏しく、表現としての造形教育に偏りがちでした。

近年の学習指導要領では、小・中学校における鑑賞教育がより重視されるようになってきています。平成23年度から実施された小学校の新学習指導要領では、鑑賞教育のために地域の美術館を利用することに加え、学校と美術館との連携を図ることが明示されています。

学校教育ではできない、美術館だからこそできることは何かをじゅうぶん意識しながら、鑑賞教室やワークショップ、作家との連携等充実したプログラムを企画、提供することによって、子どもたちが美術に親しみをもつ機会の拡充につとめていきたいと考えています。

［一次評価の理由］

- 平成20年度から、市内の子どもたちの作品を一堂に展示する「児童生徒造形作品展」の会場となっています。学校・幼稚園と緊密に連携しながら、運営にあたっています。
- 平成19年度から実施している小学生美術鑑賞会の対応には、学芸員と専門のボランティアがあたり、ワークシートなどを利用して、鑑賞の楽しさを知ってもらえるようつとめています。受け入れ側が経験を積むことによって、内容も充実度を増しています。